念願達成の正念場 2

田宮治

ハナ号の敵討ち

平成二十一年十一月二十一日、ついにその日がきた。私は入念な準備のもと川崎と千葉を結ぶ「海ほたる」に向かった。暗かった海底トンネルを抜けると急に明るくなり、この橋の上からの海はおだやかで、薄明かりの中に点々と船の灯し火が浮いている。風速は三メートルと表示されている。よしよし絶好の猟日和だ。あと三十分もすれば山彦会千葉支部に着く。

北嶋氏は六時四十分だというのに家族で迎えてくれた。朝食をとりながら、まず昨日の山の様子や、ハナ号の戦いぶりを事細かく聞くことにした。

そこは、篠竹の茂る山裾の猪のヌタ場近くで、ハナ号とユリ号が何回も篠竹をくぐり、行っては戻った揚げ句、鳴き出したとのことである。ハナ号たちは初めての出猟で猪を起こしたようである。

話の状況から、その行動は偶然居合わせた猪に寄り付いたものではない。完全に寝屋を突き止め、その場で止め、絡み、見事に顔面に食い下がり、揚げ句の果て二メートルも飛ばされたものである。

本来ならば、その場で願ってもなかなかできない止め犬による「単独止め撃ち」が楽しめたはずである。

残念なことに、少し慌てたことと止めている猪の陰に黒いユリ号がいるので撃てなかったというが、まあ、初めての止め現場では当たり前で、賢明な方法であったに違いない。

「よしよし、その猪を今日必ず獲りましょう」

見切り

北嶋氏は「近くにまだいますかね」と言っているが、私は若犬に咬まれてはいるが、まだ初猟期で追われていないのでそう遠くに行っていないと思ったので、その場所から二沢をからめ入念な猪跡を確認した。その結果、一沢目の田畑がある小道に、間違いない今朝の猪跡が竹藪に向かって上に登っている。

「ストップ！　この奥に車を走らせてはだめだ」

そっと車を引き返し、さらに二沢先の林道に沿って猪の抜け跡を確実に見切った。よしよし、必ずこの中に入っている。本来ならば猪の登った竹藪がくさい。その下の畑あたりにタツを置くところであるが、今日の北嶋氏には俺のすぐ後ろで、俺のやることをすべて見てもらい、覚えてもらわなければならない。

「北嶋さん、あの猪が登った先の小峰の裏に案内してください」

幸いなことに、まだ誰も入っていない林道をゆっくり静かに軽トラの登れるドン詰まりまで行き、大杉林の中で止めた。薄暗い杉林の左上に見える五〇メートルくらいの透けた大峰が猪の登った竹藪のちょうど上に続く峰筋で、小沢が一本下に向かって入っているとのことである。

小峰伝いに登った猪に的を絞り、犬群を流す作戦であるが、北嶋氏の話では地元猟人の甲斐犬群を切りまくった荒猪もこの山を根城にしているようだ。

当然のことで、今日連れて来た犬群はどんな荒猪でもびくともしない一秋目で仕上げた「一ノ矢」と、昨年出来上がった「二ノ矢」の犬群から選んだブル号、カツ号、ブイ号、マロ号、シロ号の五頭である。

この五頭ならば七〇キロから八〇キロの逃げ足が速い猪でも必ず咬み止め、今日必ずやって見せたい「止め猪の一メートル撃ち」もできるはずである。

絶対の自信はあったが、そんなことは一切言わず、「さあ行くぞ！　北嶋さん、猪の登った小峰に向かってください」

あくまでも見切った猪に標的を絞った、いつもどおりの「俺流の単独猟」である。二人で犬たちの様子を見ながら、必ず猪より高い所を狩り進むのは、「止め猪」に寄るのが一番有利であることと、猪の攻撃に対する安全策なのである。このことも教えなければならない。

千葉の猟場。ボサ藪で、並の犬芸ではなかなか猪は止まらない。その上、入ったら動けないので撃ちこみづらい

鳴き声を聞き分ける

犬群はすでに猪を感じているらしく少し離れ気味だが、それでも時々連絡に戻って来る。どうも先にいる北嶋氏が気になるようで、迂回するように回り込んで私の前に来る。「よしよし、猪がいるか。よしよし」と一頭ごとに頭を撫で元気づけて犬たちと一緒に北嶋氏の前に出た。

二ノ矢の千代号に仔犬6頭が生まれる。すべてを残し、田宮系の存続に繋げたい。左上が母犬千代号。「二ノ矢」のブイ号、カツ号、武蔵号と千代号は兄妹犬

さて、いよいよというところでは、必ず主人が犬群のすぐ後ろに付くことで、めいっぱい犬たちを元気づけ、猪の寝屋に有利な方向から確実に入れるようにしなければならない。それと今日は、「俺についてきい。猪はこうして撃つものだ」ということをきちっと見て覚えてもらわねばならない。

「さあ、よく見ていてくださいよ」と気合を入れ、先頭になって狩り出した。今までは小峰伝いにゆっくりゆっくり進んでいたが、銃を右手に握り直し、峰を少し下りた九合目くらいにある猪道に乗った。

犬猟での勢子は必ず猪道を狩り進むことを教える。どの山でも猪がいれば八合目や六合目、時には崖で歩けそうもない所でも崖下に必ず狩り進める猪道があるものだ。ただ、その猪道を狩り進む中で大切なことは、犬芸のできていない場合は必ず峰筋を歩くことである。

基本的に犬芸が今一つで未熟なうちは、犬が鳴き出したら静かにその場で待つことであり、絶対に音をたてずに動かないことである。そうすれば、猪は必ずその山の高い峰を目指しトコトコと登って来るものである。それを迎え撃てばよい。

反対に犬群が咬み止めで一流芸ならば、たとえ大猪といえど、まず上に来ることはない。必ず下に咬み落とすものである。

最も注意しなければならないのが犬群の鳴き声である。同じように思われる止め鳴き声だが、本当の接近戦で咬みに入った時は「ワンワン、ギャンギャン」の連続的鳴きで、山々に響き渡り、山が割れるほどである。このような場合は、どんな乱暴な寄りでも猪が飛ぶとか、逃げる心配はない。犬群にケガをさせないために一時でも早く全力で猪の止め現場に急行し、思い切って近寄り、一〇メートルくらいから犬たちをよく見て地面に着弾するように撃つことである。千葉のように竹藪のひどい所では止め刺しとか、横撃ちは厳禁である。

一方、まだ咬みに入っていない止め鳴きは、区切りのよい「ワン、ワンワン」が多く、時々「ギャッ、ギャッ」と鳴くが、その場合のほとんどは大猪で、鳴き続けるのは咬みに入るタイミングを狙っているのである。大猪にはゆっくり落ち着き、静かに寄ることが大切なことである。

そして、大猪の場合は比較的離れての攻防であるので、よく犬の動きを見て一〇メートルくらいまで接近して確実に狙って撃つようにすることである。この辺のことを今これから起こる実戦に備えて改めて説明する。

勝負の接近戦

犬群の動きがさらにせわしくなり、T字形になっている右尾根に狩り下って行った。静かに二、三分待っているとシロ号とブイ号が戻って来た。右尾根のどん詰まりは集落で、飼い犬の鳴き声が聞こえて来る。T字を突き破った先の急坂の竹藪が、朝、猪の登った所だということだ。その藪でバリッ、バリッと音がする。ブイ号とシロ号がその音に反応してぶっ飛んで行った。

「よし出るぞ！」

二人で立ち止まり、全神経を下の犬群に集中、鳴くのを待った。一分も経たないうちに「ワン、ワン、ワン」と、静けさを突き破るブル号の力強い寝屋鳴きが始まった。

「よし出たぞ！」

どうしたらよいか確かめるように私の顔を見る北嶋氏に、「まだまだ。動くな……」

その少しの間に奥に向かっての追い鳴きに変わった。

「まだまだ。すぐ追い付き、咬み止めるから」と言い終わらないうちに「ギャッ、ギャッ」と二、三回猪に咬みついた声が聞こえ、「ワンワン」「ギャンギャン」の接近戦の咬み止め鳴きになった。山が揺れ動くような犬群の咬み止め鳴きが山々に響きわたり、ついにその瞬間がきた。

「よし、お前はあの小峰伝いに駆け下りろ。俺はこの小沢がはじまる凹地を走るから……。絶対に俺から離れず、高い所からよく見るのだぞ」

そう言い残し、ぶっ飛んで犬群の声に向かって駆け下りた。

犬群は五〇メートルくらい下で、猪が動けない咬み込みに入ったようで「グウッ、グウッ」と威嚇する猪の声まではっきり聞こえてくる。二〇メートルくらいまで近寄るが、枯れ竹藪で見通せないどころか思うように下りられない。腰まで埋まる藪を潜ったり飛び越えて必死で追うが、少しずつ下に下にとずり落ちているようでなかなか追いつけない。

少し足場の良い所に立てたので大声で「よし頑張れ。ジジが来たぞ！」と全犬に活を入れる。もう絶対大丈夫と思うこのような場面では、いつもやっている「俺流の元気づけ」である。

振り返ると北嶋氏が一〇メートルくらい後ろの高い所から私を見下ろしている。「よく見てろよ」と、さらなる茂みに飛び込んで行くが、枯れ木藪の中でどうにもならない。

「焦ることはない。必ずやって

見せられるのだから……」と自分に言い聞かせながら、やっとのことで犬群に追いついた。五頭に咬みこまれた猪は必死でのたうちまわり、下に下にとずり落ちている。ちょうどドジョウやウナギが人の手から逃れる時のように、犬群の咬みから逃れるために大きく首を振り、唸りながら藪をくぐり、越えて下に落ちている。そのすぐ後ろに続いて追うが、とても撃てる状況ではない。

止め猪を撃つための軽装。必要最小限の、腰にナタとナイフ、それに犬をつなぐ引き綱だけ。ただし、背袋には水とパンくらいは必ず入れておくことである

二〇メートルもそんな追っかけが続いたところで、やっとチャンスが来た。目の前に杉林の始まる一本の大杉がある。その下が、茂みからほんの少しではあるが開けている。

「よし、行くぞ！」と全力で突っ走り、団子になって咬み下ってくる犬群と猪の真横に立てた。そして併走すること五メートルくらい。犬群をよく見極め、絶対の自信をもって猪の肩口から首を突き抜けても必ず地面に着弾する「必殺の三〇センチ撃ち」を敢行したのである。

「ズシーン」

鈍い銃音とともに、猪は崩れるようにさらに五メートルくらい下の凹地に転げ落ちた。

「よし、決まり！」

振り向くと北嶋氏もすぐ後ろですべてを見ていた。びっくりしたようだが、大声を上げて喜んでいる。犬群はこんなに近くで撃ったのに何事もなかったように一犬たりとも咬みついた猪から離れず、三メートルくらい下の凹地で「俺たちが咬み獲ったのだぞ、どうだ！」というように元気に咬みまくり、吠え続けている。それを二人で眺めながら、この時でないと、教えても決して分からない猪との接近戦の攻防の要点を事細かく説明した。

北嶋氏は荒れ狂う猪のすぐ後ろを追う私を心配していたようで、「突いて来たらどうするのだろうか」とか「食い下がっている犬たちをどうかわして撃つのだろうか」と思ったようだが、すべてを見たことで、やっと得心してくれたようである。

因みにこのような「荒い寄り方」や「止め撃ち」は、犬たちと主人が信用し合っていないことにはまずもってできないことである。

つまり、主人は犬芸を信じ、決して猪の反撃のないことを知り尽くしていればこそできるのであり、犬たちだって主人が必ず駆けつけ撃ち獲ってくれると信じているからこそ、こんなに近くで撃つ銃声にもびくともしないのである。

さらに付け加えなければならない教えづらい大切なことは、犬芸

というよりは訓練の成果で出来上がっている犬たちの狩り込みである。

つまり、どんな山でも「止めた車からの放犬」である。あくまでも自由に犬たちを狩らせ、確実に猪の寝屋に引き綱一本使わずにうまく誘導することであるが、猪獲りで重要な寝屋の特定と同様に、絶対に完成しておかねばならない大切な事柄なのである。

戦いすんで

流れる汗をタオルで拭きながら犬たちが咬んでいる猪を眺めていると、いつでも獲れた猪とは全く異なった特別な思いに駆られていた。たかが七〇キロくらいの猪ではあるが、ハナ号の敵討ちができたことである。

そして、簡単に獲れると思い、獲る話ばかり先行し、なかなか成果の出なかった山彦会千葉支部の記念すべき猪の初獲りである。まさにこの猪のお陰で念願達成ができたようなものだ。しみじみとこの瞬間を喜び味わっていた。北嶋氏も一生涯忘れないと何度も何度も言って、心から喜んでいる。犬たちはもがくように少し動いている猪に素晴らしい咬みをやっている。

しまった。こんな良い場面にカメラを持って来ていない。素晴らしい写真は残しておきたかったが、今日だけはリュックも車に残し、背袋にはパンと水、それに元気付けのユンケルを入れ、腰のベルトにナタとナイフ、そして犬たちを繋ぐ五本の引き綱の他に持たないで、猪を追っかけるのに重点をおいたのだから仕方ない。

「すごかったね。どこまでも猪を追うので、いつ刺すのかと思って見ていたよ」と北嶋氏が言う。

「あの藪の中では、とても刺せるものではない。それよりはあのように銃で撃つのが賢明で安全な方法なのだよ。以前から何回も話しているとおり、止め猪に思いきり近寄り、食い下がっている犬たちを撃たないように真上から地面に突き刺さるように止め撃ちをすることを『一メートルくらいで撃て』と言っていたのだよ」と言うと、「どんなに聞かされても、実際に見ないことにはとても信じられないよ」とさかんに犬たちの咬み芸まで褒めちぎっている。

「全犬が猪の両脇にぶら下がるように咬みつき、銃を撃っても咬みついたまま一犬も離れなかったよね。こんなのは初めて見たよ」と感心している。

因みに、このような犬群でこれくらいの猪ならば、基本的には二〇メートルくらいのところでじっと見守ることである。無理して追っかけて撃つよりは、止め切って、殺してしまうまで待つことであるが、最後の締めくくりには主人が出て行き刺すのである。そのほうが若犬の訓練にもなるのだが、くれぐれも注意することは、二〇メートル以内に近寄らないことである。犬芸が出来上がっていないうちは、主人があまり近寄ると、安心したように咬むのをやめ猪に逃げられるからである。

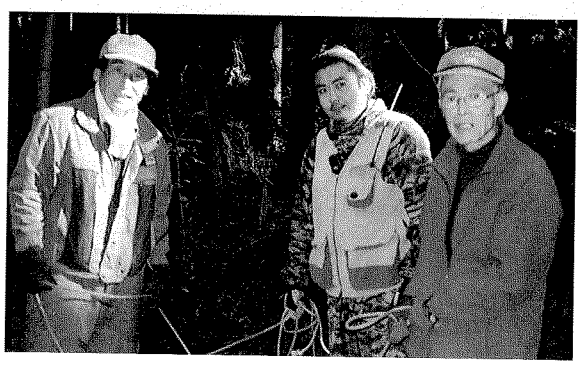
それと刺す時であるが、犬芸が出来上がり猪の両脇に咬み付き、とても撃てない時に限るのであって、わが身が自由に動ける開けた所で猪がタテガミを寝かせブタと同じように「ブッブッ」と鳴き、犬たちとおしくらまんじゅうをやっている時だけである。もうぼつぼつ犬たちを猪から引き離さないと獲物争いになる。その前、つまり今がちょうどその時である。

一頭、一頭に綱を付け、犬にケガのないのを確認しながら「よしよし、よくやった」と、この時のためにいつも持っているパンを与えて、全身を撫で回し褒めまくり、近くの杉の木に括ってその真ん中にどっかり腰を下ろし、やっとホッとした。

祝杯、改めて犬たちに感謝

猪を運び出す道を確認するために下りて行った北嶋氏が、仲間の平野さんという地元の猟人を連れて帰って来た。初めてお会いする平野氏は私と同じ年生まれで、銃猟もやるが、ワナ猟が得意で年間六十頭から七十頭獲る凄腕だという。四年間も北嶋氏とやってきて、山彦会千葉支部の頼りになる人物である。

地元猟人でもある平野氏の応援を得ての猪引き出し（平野氏は関東猪犬猟山彦会千葉支部の相談役である）



やっと咲いた、４年越しの大輪（北嶋支部長と私）

「よろしく」とがっちり握手。さっそく猪出しのお願いをした。まず犬たちを引き下ろし、運び出す道を作りながらの引き出しであるが、三人なので楽々朝の農道まで出せた。そこにはすでに北嶋氏の軽トラが置いてあり、平野氏の手回しの良さに感心した。

軽トラの周りには地元の農家の方二人が寄って来て、そのうち一人が猟人だったらしく「銃声で獲れたと思っていた」と、とても喜んでいた。猪を荷台に乗せたり、リュックから出した私のカメラで撮ってくれたりといろいろ手伝ってくれた。田畑を荒らす猪を獲ったことを思いのほか喜んでくれ、「ありがとう」と言ってお茶の缶三本までいただいてしまった。本当にありがたいことである。

あれほど長い激戦も終わって見ればほんの一瞬の出来事のようなもので、入山後三十分くらいで達成したことになる。しかもこの一戦は北嶋氏にどうしても見せてやりたいと思った、まさにお手本のような完璧な接近戦である。

あと一つ残る大猪、特に「荒猪

の止め撃ち」は必ず実戦を通し見せて、覚えてもらわなければならないが、まあまあ上々の滑り出しである。

猪を積み、堂々の山彦会千葉支部到着である。そこには北嶋氏の奥さんと四人の子供たちが出迎えてくれた。奥さんや子供たちにしても四年間も待っていたに違いない。そんな夢が現実のこととなったようで、その喜びは驚きに近いもので、さかんに歓声を上げている。まだ十一時にもなっていない。猪を解体しても十分時間のある勝ち戦である。

今日の一戦は支部というよりは、私と北嶋氏の二人きりの戦であるが、北嶋氏にはまずもって支部長、つまり親方として堂々と全員に指示できる立派な指導者になるためには本当の実力を身につけてもらわなければならない。

大物猟の親方となれば、地元はじめ全員に慕われる立派な人物で、信頼されないことには、これからの「楽しむ大物猟」はまずもってできないからだ。

そんな意味では、北嶋氏の大物猟に取り組む姿勢は素晴らしいもので、家族ごと猟場の近くに東京から移り住み、大自然の中で子供の教育や猟道を究めようとしている。三十七歳という若さでこの頑張りなのだから前途洋々たるもので、教え甲斐もあるが何よりも自覚して狩猟界をリード、守っていってもらいたいものである。

今日の成果は単独猟のやり方を、当たり前のように猪の獲れる二人きりで実行達成したことであるが、支部の要である家族全員の歓喜の中で、まず記念写真を撮る。北嶋氏は家族に猟の顛末を身ぶり手ぶりで事細かく話し、獲った喜びを仲間全員に嬉しそうに電話で伝えているが、皆びっくりしているようだ。

今までのグループではこれくらいの猪など当たり前で、二秋（昨年）の初猟だって四頭の猪を前に記念写真を撮る余裕の門出だった。

しかし、慣れるということは恐ろしいもので、どんどん獲れるようになると、獲れるのが当たり前で、あまり喜んだり、ありがたみを感じなくなり、犬たちに対する感謝の気持ちもなくなっていたようである。

それよりは、こんなに喜んでくれるこの新しい支部で、改めて猟道の基本から一緒にやれることを何よりだと思い、しみじみとその幸せに感謝しているところである。

この年で、この若者たちの真ん中にいてこんなうまいビールを飲ませていただき、奥様の手料理までご馳走になって家族全員で祝杯を上げて猟談ができるとは、なんたる幸せ者であることか。

この絶頂感を味わえるのも、実は「咬み止め芸」の優れた一流の犬群がぞっくり揃っていればこそである。ありがとうブル号、マロ号、ブイ号、カツ号、それにシロ号たちよ。

どこまで登って行ったところで、「猪猟は犬次第」。だからこその三秋でもある。

（この項終わり）

お知らせ

八月号「暑中名刺交換」欄募集

本誌は創刊以来恒例として、一月号は年賀、八月号は暑中見舞いの誌上名刺交換欄を設け、猟友間の親睦と交歓に努めております。

また、名刺交換欄は住所録・電話番号帳としても大変重宝されておりますので、来る八月号「暑中名刺交換」欄をご利用いただくようお願い申し上げます。

なお、名刺交換欄は全猟の「個人情報保護に関する基本方針」に基づいて掲載しております。

◎従前よりご利用の方

変更の必要のある方は、返信ハガキにてお知らせ下さい。掲載を中止される方も必ずご連絡願います。

◎新規ご利用の方

掲載事項の「お名前・肩書き・ご住所・電話番号（電話・FAXは各一本にお願いします）」を明瞭に記入し、掲載料金一枠三〇〇〇円を添えてお申込み下さい。右の内容以外の掲載はお断りいたします。

掲載料金と原稿を同封の上、現金書留にてお送り下さい。

◎申し込み締切

六月十日厳守